

日本語における非意図的他動詞文の実現に関する考察

Non-canonical Construction in Japanese

徐 佩伶
淡江大学

要旨

本稿は、日本語の非意図的他動詞文の実現条件を影山(1996)の動詞の分類に基づき、形態的、意味的、統語的な側面から考察し、日本語の非意図的他動詞文の実現条件を動詞の形態と意味からある程度予測できることを示した。つまり、動詞の語彙特性によって外項が「動作主」として指定される場合では、非意図的他動詞文が実現しにくく、外項が「動作主」以外の意味役割を担うことができる動詞の場合は、非意図的他動詞文が実現しやすいという傾向が分かった。

キーワード：

非対格、非意図的他動詞文、他動詞性、項構造、概念構造

1. はじめに

本稿では、日本語における非対格動詞の他動詞化(語彙使役化)の統語現象を考察し、主語が目的語に対しての働きかけが意味的に薄い「非意図的他動詞文」を考察する。まず、「主語が目的語に対する働きかけ」に関して、(1)に示すような他動詞文では、主語「太郎」が動作主であり、意志を持って「倒す」という行為を行い、「倒す」の受け手である「木」に状態変化が起こる、というのが典型的である。

(1) 他動詞文

太郎が木を倒した。 (「倒す」の受け手は「木」)

(cf. 太郎が次郎を殴った。(活動動詞/接触・打撃の他動詞)「殴る」の受け手は「次郎」)

一方、(1)に対する(2)では、他動詞が目的語のある状態に変化を引き起こしたという解釈もありうるが、もっとも適切な解釈として、動詞句が主語の状態について述べるということである。

(2) a. 太郎が骨を折った。

(太郎の骨が折れている/太郎は骨が折れている)

b. 幸子が夫を亡くした。

(幸子の夫がなくなっている/幸子は夫がなくなっている)

c. 木が芽を出した。

(木に芽が出ている/木は芽が出ている)

(2a)は、太郎が「骨が折れている」状態にあるという意味であり、(2b)は、幸子が「夫がなくなっている」という状態に、(2c)は、木が「芽が出ている」という状態にあるという意味である。このような動詞句が「主語のある状態を表す」という自動詞的解釈は、(1)のような例文では許されない。つまり、「太郎が木を倒した」という一般の他動詞文では、(3)に示すように、太郎が「木が倒れている」状態にあるという解釈ができないのである。

(3) 太郎が木を倒した。

a. ≠太郎の木が倒れている。

b. *太郎に木が倒れている。

c. *太郎は木が倒れている。

本稿は、(2)に示されたような構文を「非意図的他動詞文」と称し、日本語における「非意図的他動詞文」の実現を語彙的、統語的、ないし意味的な側面からを考察する。その結果、非意図的他動詞文の実現は日本語の動詞の意味と形態からある程度予測できると結論づけられる。

1.1 ヲ格

日本語は形態格を持つ言語であり、他動詞文において目的語の名詞句に「ヲ格」が与えられているのが一般的である。非対格動詞に対応する他動詞の場合でも一般の状態変化を引き起こす他動詞と同様に、目的語に「ヲ格」が与えられている。その例は(4)に示す。非対格動詞「倒れる」と対応する他動詞「倒す」は、目的語の「木」に「ヲ格」を与えている¹。

- (4) a. 太郎が次郎を殺した。(一般の他動詞)
(その結果、次郎が死んだ)
b. 太郎が木を倒した。(非対格動詞に対応する他動詞)
(その結果、木が倒れた)

このような「ヲ格」が与えられた項は意味的に状態変化の主体 (undergoer)、つまり「倒される」対象となっている。また、主語位置にある名詞句は、動作主になることもあるが(5a)、原因を表すこともある(5b)。(5a)では「太郎」が「切る」の動作主であり、(5b)では、「お茶漬け」が「胃液を薄めた」原因になっている。

- (5) a. 太郎が電源を切った。(電源が切れた)
b. お茶漬けが胃液を薄めた。(胃液が薄まった)

以上の事実に基づき、一般の他動詞文および非対格動詞に対応する他動詞の文に関して次のように記述することができる(6)。

- (6) 他動詞文における内項は「ヲ格」が与えられ、意味的に状態変化の主体 (undergoer) となる。外項は Agent (動作主) か Causer (使役者/原因) のどちらかである。

¹ 「会う」のような動詞は格が語彙ごとに指定されている場合であり、ここの議論から外す。

1.2 問題提起

ところが、(7)の例は(6)に示した一般化だけでは捉えられない。

- (7) a. 桜が**つぼみ**をひらく。
 b. 木が**芽**を出した。
 c. コンピュータが**ミス**を生じた。 (影山 1996:114(43a))

非対格動詞である「ひらく」「出る」「生じる」に対応する他動詞は音声的に非対格動詞と同じであるが、これらの他動詞文は前述した文とは異なっている。そのような動詞が取る内項は意味的に状態変化の対象となるが、外項が Agent でも Causer でもなく、動詞句が表す状態の主体となっている。つまり、(7)に示された文は(8)のように解釈される。

- (8) a. 桜が[[つぼみがひらく] という状態]にある
 b. 木が[[芽が出ている] という状態]にある
 c. コンピューターが[[ミスが生じた] という状態]にある

このような他動詞文、外項が「動詞句が表す状態」の主体として解釈される場合を、「非意図的他動詞文」と呼ぶ²。影山 (1996:115) は(8)に示された文について、他動詞文であるけれど、概念構造としては自然発生的な非対格構造を持つと分析している。その概念構造を(9)に示す。

- (9) [Event コンピューター_i/木_j BECOME [STATE ミス/芽 BE AT-z_i]]
 (影山 1996:114(45))

影山 (1996:116) は、BECOME の主語と AT の z が同一指示であり、BECOME の目的語になるものはそれにはさまれた構造にあるとき、非対格動詞であっても対格が発動されると説明している。つまり、外項が theme の状態変化が起こる主体/場所であるときに、内項が対格を付与されても意味上非対格的に解釈される。

本稿は、(2)と(7)に示した「非意図的他動詞文」の実現がどのような統語環境、または意味的な条件の下で許されるかという問題の解明を目指し、考察を行う。以下、影山 (1996) による動詞の意味論的な分類に基づき、「非意図的他動詞文」の実現が形態的、意味的、統語的側面から予測できるかどうかを調べる。

² 張(2011)は「非意図的な他動詞文」と呼んでいる。

2. 先行研究

2.1 影山(1996)

影山(1996)では、意味論の立場から動詞の概念構造で自他対応のある動詞を分析し、主に語彙の「反使役化」「脱使役化」と「他動詞への使役化」といった三つの操作を仮定している。「反使役化」タイプの動詞と概念構造を(10)(11)に示す。

(10) -eによる反使役化動詞(状態変化の達成、動作主を要求しない)
割る→割れる、切る→切れる、崩す→崩れる、織る→織れる、欠く→欠ける、
ほどく→ほどける

(11) 概念構造における-e-反使役化

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]] (他動詞)

→[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]] (自動詞)

(影山 1996: 145(14))

(11)では、使役者(x)が変化対象(y)と同定され、意味的に束縛される。つまり、反使役化動詞が自動詞用法においてCONTROLの取る外項が内項と同一になり、状態変化を引き起こす動作主は自動詞の概念構造に含意しないということである。具体例を(12)に示す。

- (12) a. (風船を割った結果)風船が割れる。
b. 自然に風船が割れる。

「割れる」という動詞は内在コントロールが強く、必ずしも動作主を要求しない自動詞である。よって、「風船が割れる」は誰かが「風船を割る」ことによって生じた場合と、「自然に風船が割れる」場合がある。

反使役化タイプに対して、(13)にあるように、-ar-という形態を持つ自動詞は「脱使役化」タイプであり、その概念構造は(14)である。使役者(x)は自動詞用法において完全に脱落される。

- (13) -ar-による脱使役化動詞(動作主を意味的に含意する)
詰める→詰まる、つなぐ→つながる、掛ける→掛かる、薄める→薄まる、
植える→植わる、貯める→貯まる、混ぜる→混ぜる

(14) 概念構造における-ar-脱使役化

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]] (他動詞)

[x→CONTROL [y BECOME [y BE AT z]]]

↓

φ

(自動詞) (影山 1996:188(116))

(14)では、使役者(x)が自動詞用法において脱落されている。使役者(x)と変化対象(y)と同定できず、概念構造においてxがyを意味的に束縛しない。よってこれらの動詞は内在的コントロールが弱く、動作主を含意する自動詞になる。

(15) a. (花を植えた結果)花が植わる。

b. *自然に花が植わる。

「植わる」という動詞は必ず動作主を含意し(誰かが花を植えた)、(15b)に示された例のように、動作主が含意されない「自然に」という副詞と共起すると、文が容認しにくくなる。(14b)と(b)による文法的対立から、「-e-反使役化」自動詞文では動作主が含意されないのに対して、「-ar-脱使役化」自動詞文では動作主が含意されるということが分かる。

さらに、自動詞が使役化形態素(-as/os-と-e-)を付加することで他動詞になるという場合もある。これを「他動詞への使役化」と呼び、具体例は(16)と(17)に示す。

(16) -as/os-による自動詞使役化

鳴る→鳴らす、飛ぶ→飛ばす、ずれる→ずらす、減る→減らす、動く→動かす、
枯れる→枯らす、出る→出す、起こる→起こす、落ちる→落とす

(影山 1996:195(135))

(17) -e-による自動詞使役化

建つ→建てる、進む→進める、並ぶ→並べる、整う→整える

-as/os-と-e-をつけることで、CAUSE や CONTROL という意味が概念構造に導入され、目的語に直接に/間接的に働きかける主語が導入される。-e-自動詞使役化の概念構造は(18)に示し、-as/os-自動詞使役化の概念構造は(19)に示す¹。

¹ 使役化形態素-as/os-, -e-は構造上、機能範疇のvに当たり、対格を与える能力がある。

(18) 概念構造における-e-自動詞使役化

x CONTROL [EVENT …]

(xは動作主に限る)

(影山 1996:197(141))

(19) 概念構造における-as/os-自動詞使役化

[EVENT x ACT] CAUSE [EVENT …]

(xは動作主でも出来事や行為でもよい)

(影山 1996:197(139))

(18)では、-e-使役化形態素の場合では導入された主語xが動作主に制限され、(19)では、-as/-os-使役化形態素によって導入された主語xが動作主以外ののものであってもよい。従って、-e-使役化形態素によって他動詞化されたタイプの動詞では外項が動作主を要求するが、-as/-os-使役化他動詞の場合では外項に動作主が要求されずに文が成立できる。-e-使役化タイプの動詞の具体例と-as/-os-使役化タイプの動詞の具体例をそれぞれ(20)と(21)に示す。

(20) a. (家を建てた結果)、家が建った。

b. *魔法で家が建った。(必ず動作主を要求する)

(21) a. (体重を減らした結果)体重が減った。

b. 病気で体重が減った。(必ずしも動作主を要求しない)

(20)では、「建つ」という動詞が必ず意志をもつ動作主を要求するため、(20b)に示され文の文脈では動作主が存在しないため、文が容認できない。一方、「減る」という動詞は必ずしも動作主を要求しないため、(21b)に示すように「病気で」という意志を持つ動作主でないCAUSEでも文が容認できる。

2.2 意味的制限

自他対応のある動詞であっても他動詞構文と自動詞構文が対応しない場合がある。(22)に示すのは「割る」と「割れる」の例である。(22b)では、「ウイスキーを水で割った」という他動詞文に対して、「ウイスキーが水で割れた」という自動詞文が許されない。

(22) a. 花瓶を割った。→花瓶が割れた。

b. ウイスキーを水で割った。→*ウイスキーが水で割れた。

(影山 1996:191(125))

影山 (1996:191) によると、動詞に動作主を要求するような場合、つまり「動作主がウイスキーを割った」というような場合では、反使役化が適用できないと説明している。「お腹を壊した」という文にも対応する自動詞文が存在しない（「*お腹が壊れた」）。また、脱使役形の動詞の場合、もとの他動詞の主語が「意図的な動作主」でない場合、脱使役化が適用できない（影山 1996:186）。

- (23) a 新雪が山頂をおおった。
 b. *山頂が新雪でおおわった。 (影山 1996:186(111))

本稿では、以上に示したような意味的な制限を考慮した上で、特別な意味を持つ動詞を議論の対象から除く。

2.3 考察方法

影山 (1996) による四種類の自他交替動詞のタイプを仮定し、非意図的 he動詞文の実現を(24)に示すような形態的、統語的な側面から予測できるかどうかを確認する。まず、(24)に基づいてそれぞれのタイプの動詞から他動詞文を作る(25a)。そして、それぞれの他動詞構文には(25b)に示すような意味になるかどうかを確かめる。予測を(26)に示す。

- (24) a. 形態的：-e-反使役化、-ar-脱使役化、-as/os-自動詞使役化、-e-他動詞使役化
 b. 意味的：外項の意味役割（動作主、CONTROL（使役者など）、EVENT）
 c. 統語的：自動詞から他動詞化、他動詞から自動詞化
- (25) a. -e-反使役化、-ar-脱使役化、-as/os-他動詞化、-e-他動詞化の動詞の他動詞構文を作る。
 X が $V_{自}$ → Y が X を $V_{他}$
 b. 「 Y が X を $V_{他}$ 」では「 $V_{他}$ が X に対する働きかけ」の意味のほか、「 Y が X を $V_{他}$ 」という状態にある」という意味が取れるかどうかを日本語母語話者に確認する²。

² 本文中に意味が取れるかどうか4人の日本語母語話者に確認した。

(26) 予測

- a. -e-反使役化自動詞は、「状態の達成」に焦点を当てるため、意味的に「動作主」を含意しない。それを前提として、このタイプの自動詞が他動詞に還元すると、項構造において、外項が必ずしも「動作主」として指定されないことになる。そうすると、外項が「**動作主**」以外の意味役割を担うことが可能になる³。よって、非意図的他動詞文の実現が可能である。
- b. -ar-脱使役化自動詞は、意味的に「動作主」を含意している。それを前提として、このタイプの自動詞が他動詞に還元すると、項構造において外項が「**動作主**」として**指定**されることになる。「動作主」以外の意味役割を担うことができないため、非意図的他動詞文の実現が不可能になる。
- c. -as/os-自動詞使役化の他動詞は、-as/os-の付加によって外項が導入され、その外項は「動作主」「出来事」などのように、「**動作主**」以外の意味役割を担うことができる。よって、非意図的他動詞文の実現が可能である。
- d. -e-自動詞使役化の他動詞は、-e-の付加によって外項が導入され、その外項が「動作主」に限る。項構造において外項が「**動作主**」として**指定**されているとするため、「動作主」以外の意味役割を担うことができない。よって、非意図的他動詞文の実現が不可能である。

次節では、以下にあげる動詞を調べ、(2)に示した予測が正しいかどうか検証を行う。

- (27) a. -e-反使役化タイプ
割れる、抜ける、砕ける、折れる、ほどける、欠ける、崩れる
- b. -ar-脱使役化タイプ
植わる、詰まる、貯まる、混ざる、薄まる
- c. -as/os-使役化タイプ
ずれる、減る、枯れる、蒸れる、なくなる、起こる、落ちる、出る
- d. -e-使役化タイプ
建つ、進む、並ぶ、整う

3. 考察と分析

3.1 -e-反使役化タイプ

まず、(27a)に挙げられた-e-反使役化タイプの動詞から見てみよう((28)に再掲する)。

³ 意味役割の付与子は何であるかをここでは問題しない。

(28) 動詞

割れる、抜ける、砕ける、折れる、ほどける、欠ける、崩れる

(28)に示した-e-反使役化タイプの自動詞には対応する他動詞があり、そしてそれらの他動詞で文を作ると、(29)に示されるように「一般の他動詞文」の解釈ができる。同時に、その他動詞文にも、例えば、「太郎が爪を割った」という文に、(30a)に示す「太郎が[爪が割っている]状態にある」という非意図的解釈が可能である。(30b-f)の解釈も同様にそれぞれ(29b'-f')に対応している。

(29) a. 太郎の爪が割れた。

a' . 他動詞文：(ドアで) 太郎が爪を割った。

b. 太郎の歯が砕けた。

b' . 他動詞文：(交通事故で) 太郎が歯を砕いた。

c. 太郎の歯が欠けた。

c' . 他動詞文：太郎が歯を欠いた。

d. 太郎の骨が折れた。

d' . 他動詞文：太郎が骨を折った。

e. 太郎の心がほどけた。

e' . 他動詞文：太郎が心をほどいた。

f. 太郎の体調が崩れた。

f' . 他動詞文：太郎が体調を崩した。

(30) 非意図的他動詞文の解釈

a. 太郎が[[爪が割れている]状態]にいる

b. 太郎が[[歯が砕けている]状態]にいる

c. 太郎が[[歯が欠けている]状態]にいる

d. 太郎が[[骨が折れている]状態]にいる

e. 太郎が[[心がほどけている]状態]にいる

f. 太郎が[[体調が崩れている]状態]にいる

ただし、このような非意図的他動詞文は一般の他動詞文と統語的に異なっている。(32)に示す非意図的他動詞文は、受動文にすることができない。具体例を(31b)と(32b)に示す。

- (31) 一般他動詞構文と受動文
- a. 太郎が窓ガラスを割った。
 - b. 窓ガラスが太郎に割られた。

- (32) 非意図的他動詞文と受動文
- a. 太郎が病気で爪を割った。
 - b. *爪が病気で太郎に割られた。

ところが、(29)に示した他動詞は常に非意図的他動詞文を作ることができるのではない。(29a)では、爪が太郎の一部であり、「太郎の爪が割れている」という意味が他動詞文の「太郎が爪を割った」という文に含まれているが、(33)ではそうではない。(33a)ではレンズが眼鏡の一部であり、「眼鏡のレンズが割れた」という意味が「眼鏡がレンズを割った」という他動詞文では許されない。(29)に示されたような交替が許されるのは、外項と内項が全体と部分の関係(例えば、人と歯/爪/骨/心)にないといけないと結論づけると、(33)の例はすべて反例となってしまう。(以下、矢印「→」の右に他動詞文を示す)

- (33) a. 眼鏡のレンズが割れた。→*眼鏡がレンズを割った。
(非意図的解釈：眼鏡が[[レンズが割れている]状態]にある)
- b. 傘の柄が折れた。→*傘が柄を折った。
(非意図的解釈：傘が[[柄が折れている]状態]にある)
 - d. 靴の紐がほどけた。→*靴が紐をほどいた。
(非意図的解釈：靴が[[紐がほどけている]状態]にある)

影山(1996)の分析では、**-e**-反使役化の他動詞主語が **CONTROL** (経験者) でなければならぬと仮定され、眼鏡、氷河、傘が経験者ではないため、文が容認されないことが説明できる。

ただし、影山の分析に一つ例外となる動詞がある。それは、「抜く」「抜ける」である。主語が経験者であるという条件を満たしても、(34)(35)に示すように「抜く」が非意図的他動詞文を作ることができない。つまり、「患者が髪の毛を抜いた」という文は一般他動詞文としてしか解釈できない。

- (34) 患者が髪の毛を抜いた。
- (i) 一般他動詞文解釈：(精神)患者が自分の髪の毛をわざと抜いた
 - (ii) 非意図的解釈：*患者が [[髪の毛が(治療のせいで)抜けている]状態]にいる

- (35) *患者が{放射線治療のせいで/薬の影響で}髪の毛を抜いた。

「抜く」「抜ける」のような動詞は-e-反使役化タイプの動詞のうちにもまれな例であり、「抜く」「抜ける」が(9)に示されたような概念構造では捉えられていないというのが事実である。ただし、「抜く」「抜ける」ペアの動詞を除けば、-e-反使役化タイプの動詞が一般に非意図的他動詞文の解釈を許すということは予測通りである(26a)⁴。

3.2 -ar-脱使役化タイプ

次に、(27b)に挙げられた-ar-脱使役化タイプの動詞を見てみよう((36)に再掲する)。

(36) 動詞

植わる、詰まる、貯まる、混ざる、薄まる

脱使役化タイプの動詞は「植わる」「詰まる」などがあり、意味的に主語が「意図的動作主」を要求する。(37a)に示す「桜の木が植わった」という文には「誰かが桜の木を植えた」という対応する他動詞文があり、「意図的」「うっかり」という「動作主」の状態を描写する副詞と共起できる(37b-i)。一方、「太郎が気づいたら」という状況では、「太郎」が「意図」を持たない「経験者」とであると、(37b-ii)が示すように容認できない文である。

- (37) 桜の木が植わった。→(他動詞文) 太郎が桜の木を植えた。
 i. 太郎が意図的に/うっかりして桜の木を植えた。(動作主)
 ii. *太郎が気づいたら桜の木を植えた。(経験者)

このように「動作主」以外の意味役割を担うことができない動詞「植える」の場合、「太郎が[桜の木を植えた]状態にある」という非意図的解釈もできない。これは(26b)に示した予測の通りである。(38)の例も同様に、これらのタイプの他動詞文には解釈において非意図的解釈が不可能でなる。

- (38) a. 太郎の鼻が風邪で詰まった。→*太郎が風邪で鼻を詰めた。
 (非意図的解釈：風邪で太郎が[[鼻が詰まった]状態]にいる)
 b. 太郎のお金が気付かないうちに貯まった。→#太郎がお金を貯めた。
 (非意図的解釈：太郎が気付かないうちに[[お金が貯まった]状態]にいる)⁵
 c. ダムに水が溜まった。→*ダムが大雨で水を溜めた。
 (非意図的解釈：ダムが[[大雨で水が溜まった]状態]にある)

⁴ 「抜ける」「抜く」が(9)に示されたような概念構造では捉えられていない。「抜く」「抜ける」の概念構造はどのようになっているのかは今後の課題にする。

⁵ #という記号は、文自体が文法的であるが、ここで意図する意味では許されないということを示している。

以上の考察から、-ar-脱使役化自動詞は、非意図的他動詞文を作ることができないことが分かる。それは、-ar-脱使役化タイプの他動詞は外項に「意図的動作主」を要請しているからであり、(26b)に示した予測の通りである。次に、自動詞使役化の場合を見る。

3.3 -as/os-使役化タイプ

(27c)に挙げられた-as/os 使役化タイプの動詞を(39)に再掲する。

(39) 動詞

ずれる、減る、枯れる、蒸れる、なくなる、起こる、落ちる、出る

-as/os-使役化自動詞は、使役要素-as/os-の付加によって他動詞化されても、外項に対して「動作主でなければならない」という要請がない。そのため、(26c)に示されたように、これらの動詞で作られた他動詞文には非意図的解釈が可能であると予測する。主語が他動詞文において、(40)では「経験者」として解釈され、(41)では「場所」と解釈されている。(42)では外項となる主語が内項と全体部分関係にある。これらの他動詞文はいずれも非意図的解釈が許される。「幸子が夫をなくした」という他動詞文に「幸子が[夫がなくなった]状態にある」という意味があり、「木が芽を出した」という文に「木が[芽が出た]状態にある」という意味がある。「木が葉っぱを落とした」という文も「木が[葉っぱが落ちた]状態にある」という意味が可能である。

- (40) a. 幸子の夫が亡くなった。→幸子は事故で夫をなくした⁶。
b. 太郎の意識がなくなった。→太郎が意識をなくした。
c. 太郎のつま先が蒸れた。→(暑さで)太郎がつま先を蒸らした。
(非意図的解釈：太郎が[[つま先が蒸れる]状態]にいる)
- (41) a. 木に芽が出た。→木が芽を出した。
b. 家族や知人に心筋梗塞が起こった。→家族や知人が心筋梗塞を起こした。
- (42) a. 木の葉っぱが落ちた。→木は風で葉っぱを落とした。
b. ダムの水が枯れた。→ダムが水を枯らした。
c. 体の水分が減った→(酷暑で)体が水分を減らした。
(非意図的解釈：体が[[水分が減る]状態]にある)

⁶ 「夫がなくなった」ということもある種の「主語の内部に起こること」である。この関係は、身内関係にない他人がなくなった場合には、非対格他動詞文が使えないという事実で証明できる。

- (i) a. *太郎が隣の会社の社長をなくした。
b. *太郎が友達のおばさんをなくした。

まとめると、-as/os-使役化タイプの動詞は-e-反使役化タイプの動詞と同様に、他動詞文において外項に動作主でなければならないという要請がないため、(26c)に示した予測の通り、非意図的解釈が許される。

3.4 -e-使役化タイプ

最後に、(27d)に挙げられた-e-使役化タイプの動詞を見てみよう（(43)に再掲する）。

(43) 動詞

建つ、進む、並ぶ、整う

-e-使役化自動詞の場合も、-as/os-タイプと同様に本来自動詞で、-e-という使役形態素の付加によって他動詞になる。考察した動詞のうち、非意図的他動詞文として容認できそうなのは、「整える」と「並べる」のみである(44a, c)（目的語の変化が主語の内部にある場合と、主語が場所を示す場合）。(44b)と(44d)では「太郎が癌を進めている」や「空き地が家を建てる」などの他動詞文が許されず、非意図的解釈も不可能である。

- (44) a. 太郎の呼吸/脈が整った。→*/??太郎が呼吸/脈を整えた。
 （非意図的解釈：太郎が[[呼吸/脈が整う]状態]にいる）
- b. 太郎の癌が進んでいる。→*太郎が癌を進めている。
 （非意図的解釈：太郎が[[癌が進んでいる]状態]にいる）
- c. 広場にいろいろなテントが並んでいる。→*/???広場が（祭りで）いろいろなテントを並べている。
 （非意図的解釈：広場が[[いろいろなテントが並んでいる]状態]にある）
- d. 空き地に家が建つ。→*空き地が家を建てる。
 （非意図的解釈：空き地に[家が建っている]状態にある）

-e-使役化タイプの自動詞は他動詞文にするときに、主語が「意図的動作主」を強く要請するため、動作主以外の主語が許されない。(26d)の予測では、非意図的解釈はこのようなタイプの動詞では不可能である。

4. 結論

本稿は日本語の非意図的他動詞文の実現条件を影山(1996)の動詞の分類に基づき、形態的、意味的、統語的な側面から考察し、日本語の非意図的他動詞文の実現条件は動詞の形態と意味からある程度予測できることを示した。事実として、**-e-**反使役化タイプの動詞と**-as/os-**使役化タイプの動詞は他動詞用法において、非意図的解釈ができるのに対し、**-ar-**脱使役化タイプの動詞と**-e-**使役化タイプの動詞はそのような解釈ができない。つまり、動詞の語彙特性によって外項が「動作主」として指定される場合では、非意図的他動詞文が実現しにくく、外項が「動作主」以外の意味役割を担うことができる動詞の場合は、非意図的他動詞文が実現しやすいという傾向が分かった。

日本語を教える現場において、日本語学習者にとって一般の他動詞文の学習は比較的容易であるが、非意図的他動詞文の学習はそうではない。どのようなタイプの動詞が非意図的他動詞文を作ることができるのかは、日本語母語話者以外なかなか判断できない。今後の課題として、非意図的他動詞文解釈の認可条件をさらに形式化し、その成果が日本語教育現場に生かしたい。

参考文献

- 井上和子 (1976a) 『変形文法と日本語 (上)』大修館書店
井上和子 (1976b) 『変形文法と日本語 (下)』大修館書店
影山太郎 (1996) 『動詞意味論-言語と認知の接点』くろしお
柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館
高見健一 (2011) 『受身と使役-その意味規則を探る』開拓社
仁田義雄 (2009) 『現代日本語文法 2』日本語記述文法研究会
原口庄輔・中村捷 (1992) 『チョムスキー理論辞典』研究社
早津恵美子・高京美 (2012) 『コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態』コーパスに基づく
言語学教育研究資料 6, 東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Hale, Ken and Keyser, Jay Samuel (2002) “Prolegomenon to a Theory of Argument Structure.” MIT Press
Jacobsen, W. M. (1991) The Transitive Structure of Events in Japanese, Kuroshio
Kuroda, Sige-Yuki. (1965) Generative Grammatical Studies in the Japanese Language. Doctoral dissertation,
MIT.
Perlmutter, David (1978) “Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis” BLS4. pp.157-89
張猷定 (2011) 『非意図的な他動詞についての研究-多義性と制約から分類』修士論文: 政治大学